

『ちいさいケーブルカーのメーベル』（注1）という絵本をご存知だろうか。アメリカの絵本作家バージニア・リー・バートンの作品で、この人は『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』や『はたらきもののじょせつしゃけいていー』『マイク・マリガンとスチームショベル』など乗り物を擬人化した絵本をたくさん描いている。乗り物でなく家を主人公にした『ちいさいうち』ではコルディコット賞を受けている。経歴を見ると父親がなんとマサチューセッツ工科大学の学長だったようで、機械への愛情あふれるまなざしは、父親ゆずりなのかもしれない。

『メーベル』は、サンフランシスコに今も観光の目玉としてあるケーブルカーの廃止問題を題材にしている。ケーブルカーを古くさい乗り物だから撤廃して、バスに変えてしまおうと市議会が決定してしまう。絵本の中ではバスのビッグビルという悪者（悪バス？）が市議会議員と知り合いだから、ということになっている。

それを聞いたケーブルカー廃止に反対する市民たちは、図書館に集まって反対運動の相談をする、という場面がある。そこまで読んだ私は目を白黒、？？？と？を盛んにアタマから飛ばした。図書館とあるが、サンフランシスコ市立図書館なのだろう。

私は図書館司書として、国家公務員と地方公務員をだいたい二〇年ほど勤めた経験がある。その経験から言えばこんな場面は信じられない。日本の場合、図書館は本庁とよばれる市町村役所とは独立した教育委員会事務局の中の社会教育という部門に属している。独立したとはいえ、教育長は市町村長に任命されるから、行政機関としては一体である。その議会が決めたことに反対しようという連中に、図書館を貸したりしたら、館長どころか教育長のクビまで飛ばされるだろう。我が国の官僚制度からは考えられないのだ。

その後、アメリカの図書館のあり方に関心を持って調べると、私たちが市町村立図書館とと思っているものとは、アメリカの公共図書館はかなりちがうことがわかってきた。日本にも市民図書館という名称があるが、アメリカの図書館はまさにそれで、地方自治体の行政機構の一部に属していないのだ。

たとえばニューヨーク市はブロンクス、マンハッタン、スタテン島、ブルックリン、クイーンズの五地域に分かれている。ところがニューヨークパブリックライブラリ、和訳すればニューヨーク市立図書館はブロンクス、マンハッタン、スタテン島しか守備範囲にしていない。ブルックリンパブリックライブラリとクイーンズはまったく別の図書館が受け持っている。しかし和訳するとブルックリン区立図書館とクイーンズ区立図書館になり、ニューヨーク市が運営しているように見える。しかしニューヨーク市の組織図を見ても図書館はどこにもない。

公（おおやけ）がどうも国も地方も同じようで一つしかない日本と違って、アメリカは二つあるのだ。二つの公といってもわかりにくいだが、公共という言葉を使えば、公と共が別れているということだ。（注2）ケーブルカー廃止を市議会が決めたことに反対する市民が図書館に集まって反対運動をはじめめるのも、公と共が別々だから可能なのである。もちろん市町村なども公共図書館に対して補助金を出すのだろうが、図書館は独自に市民からの寄付金による財団によって運営されていることが多い。人事権も別、組織も別だからこの絵本のようなことができるのだ。

最近、ようやく日本でも『メーベル』にあるようなことが不思議でなくなっている。住民投票とよばれるものだ。『メーベル』でも、図書館に集まった市民たちの運動で、ケーブルカーを廃止するかどうかは住民投票にかけられることになる。そして廃止反対派が勝つのだ。その前に悪バスのビッグビルは、ケーブルカー廃止にそなえて、深夜の街を走る

のだが、坂のきついサンフランシスコではバスはスリップして怖い目にあってしまうという、絵本の物語にはなっているのだが。ケーブルカーは古くさいながらブレーキを三系統も持ち、急坂に適した安全な乗り物ということなのだった。

経済効率優先の公に対して、この絵本の中では、ケーブルカーは今でいうスローライフの象徴として市民が守ろうとする。メーベルたちケーブルカーのセリフに

「おぼえている？この町が小さくて、みんながたがいにかおみしりで、だれもいそいだり、いらいらしたり、しなかったころのこと、むかしはよかったわねえ。」

とあるように、お互いがお互いの顔を知り、お互いのために働いていた社会、のんびりとしていた共同体が、「公」に対する「共」の心情的な源になっている。

そしてさらに日本社会も、NPOが、公共事業の共の部分担っていくことを期待されるようになって来ている。いくら民主主義が制度的に整備されても、「私たちの」という思いを失えばただのうっとおしい権力でしかない。住民投票もNPOによる公共事業も、市民参画の重要な手法なのだ。しかし、かつての第三セクターや、民間委託のような効率のみ優先のしょぼいアライバイ行政の悪夢が浮かび上がってきてしまうのは、我々の公共というものへのイメージ不足かもしれない。『メーベル』は絶版になっているが、是非図書館で探し出してきてイメージを補給してほしい。かつては我々も、社の森や、お寺の境内、銭湯など公とは関係のない共の拠点を持ち、時には公と鋭く対立できていたのだから。

注

1. 『ちいさいケーブルカーのメーベル』バージニア・リー・バートン作、桂宥子・石井桃子訳、ペンギン社、一九八〇年
2. 富野暉一郎「分権社会のゆくえ～市民参加の今後」『地方分権』四月号、ぎょうせい、二〇〇一年四月